

Title	クルト・マイによる「マイスターの修業時代」解釈の問題点について
Sub Title	An approach to Kurt May's interpretation of Meister Lehrjahre
Author	猿田, 憲(Saruta, Toku)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1960
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.10, (1960. 6) ,p.75- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00100001-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

クルト・マイによる『マイスターの修業時代』 解釈の問題点について

猿 田 恵

とくにゲーテにかぎるまいが、芸術作品を理解する為には、作者に対する全体像が作られていなければならぬ。すぐれた作品が固有の法則をもってひとり歩きすることは自明のことであり、それが生きた詩人の生の模写である筈もないが、作品と作者の生とを非連続に考えることが一体できるものであろうか。かりに作品の評価をすぐれた形式、技法、表現にとどまらず、そこに示された理念や感情や知性あるいは、倫理性にゆだねた場合、それらは作品の特性であるとともに、作者のそれであることにまちがいない。私達は作品と同時に作者の生に感動したことになるであらう。

作者の生とは一体何であるか。ここに日常的な作者の生活を考えるものはないだろう。伝記が単なる個々の事実の羅列にすぎず、「何が」でなく「いかに」発展したかだけが追い求められるとき、これがすぐれた伝記となりえないことは既にグンドルフの指摘をまっまでもない。(F. Gundolf: Goethe, Einleitung) また洗濯屋の勘定書が作者の生の一端を示すものとして芸術作品の理解にすこしも加えるところがないことも改めて云うまでもない。すぐれた芸術家の生とは、偶然の、任意の生ではなく作品との連関において、同一

実体のこととなった属性として、作品は生を含んでいる肉体として、生は作品と同一の衝動、同一の力として理解されなければならない。ゲーテのみについて云うならば、ゲーテは人間の形成力がその存在の全範囲にわたって浸みとおり得た近代の最大の永遠化された例証である。彼の造形力は凡ての彼の偶然的な遭遇を運命に、必然的な生の過程に変化させることができた。彼の運命には彼が自らデモニーニッシュと呼んだものが支配している。デモニーニッシュとは外部から入りこんでくる力ではない。まるでジェニーという言葉と同じ様に人間の性格とはなれがたく結びついている。それは運命に、つまり人間が身に享け、為すところのものにぞくする。運命は性格の一部であり、性格はまたすでに一つの運命である。

グンドルフはこうして、ゲーテの総体の姿を叙述しようとするが、作品において存在に注目しようとする為に、芸術家の生を彼らの芸術以外では見まいとする為に、更にまた「生の第一義的な形式」である芸術作品にのみ向う為に、彼を簡単に作品中心な形而上学的文献学の立場と考へてはならない。彼の考へる生はその過程の為に作品を証拠にするような生ではなく、またその過程を認識する為に作品を手段と化そうとするような生ではなく、したがってロットェルシャルロットェ、ヴェールターゲイテというような現実的な生ではない。私達がここで追い求めようとする作者の生もまた同様その種のリアリティをもつものではない。

芸術を創造する生はかくして、作者にあっては、作品の素材としてではなく、作品と同一実体の異った属性であり、それ故私達読者にとっては認識されるべきものではなくて追体験されるべきものである。それ故にこそ、グンドルフは、致命的な矛盾とも思われるような、「心の中にゲーテの全体的な像をもっていないものはゲーテの片言隻句すら理解できない」という表現をするに至る。云うまでもなく、片言隻句を読む以前にどうして、全体的な像を抱くことができるかという反論を許すことになるのである。(高橋義孝氏「文学研究の諸問題」八六頁参照。)

この種の自家撞着は高橋氏の指摘にもあるごとく(前掲書一九一頁)、解釈学派のシュタイガーにも見られるものである。「私はその詩についてぜひとも何か新しいことを云わなければならないとしたならば、私は事実上ある感情、気持から出発する以外にどうしようもあるまい。この感情、このあいまいな、私自身にとってまだ正体のさだかでない気持を、私は次第にはっきりとしたものにしてゆき、それを精確な概念に転じてゆく。」(E. Staiger: Grundbegriff der Poetik (1951?) 249 ff. 高橋訳) このあるものについての

「漠然とした感情」とは何か。まず何よりこれこそ分析されるべきものではないのか。「解釈」という言葉を早計に「字句の解釈」と速断することはならないが、やはり、「客観化せられた精神の一片を全現実から切りとって孤立せしめるのが常である。」(DVJS. 1952, Heft 1. S. 102f. 高橋義孝氏 前掲書、一九三頁。)という非難は蒙らねばなるまい。

ゲーテの運命の上には、彼自身がデモニッシュなものと呼んだものが支配している。芸術が人間性のひとつの根源的な状態を意味するものである以上、作品はそのまま生そのものであり、彼らの生を作品を描いて把握しえないという事実の逆もまた真であり、両者は相互関係になければならない。知識や解釈とともに作家の生と作品に対する共感や追体験も理解に参与する不可欠の要素でなければならぬ。何よりもまずゲーテを選ぶという事実が、私達とゲーテとの間に積極的感情を示してはいないか。

今はクルト・マイの問題点を考察するのであるから、文芸学の迷路に入ることはさけない。だが「芸術的な体験は学問的な認識の形式では捉えられない」としたら、知的な認識が可能なのはただ科学だけであって芸術ではないとしたら、シンメルの『ゲーテ』の序言はいみじくも文学研究の悲劇性をいいてたと云うべきであろう。「彼が創造した一切のものを、一つの大きな告白となづけたゲーテの全解釈は、それが承認せられると否にかかわらず、つねに又解釈者の告白であるだろう。」(G. Simmel: Goethe (1913) S. 4) ここに一つの告白がある。これはなるほど科学とはなりえまいが、すぐれたゲーテ理解の一つの結果である。似たような立場にホーエンシュタインの『ゲーテ』がある。

「ゲーテの生涯の作品は一つの全体である。ひたすらこの全体の一部分、一つの連関の一片としてのみ、個々の作品は評価されねばならぬ。すなわち『個々独立』にはなく、その創造者の生活との繋りにおいて、『切りはなして』ではなく、『デモニッシュ』なるものとの深い関係において、つまりはこの生命の『無名』の根源においてみられねばならぬ。個々の作品は以下の叙述の構成において、いわば生ける有機体の分泌物としてのみ問題となるのである。全作品の『内的連関』、『発生史』は、生命活動の、たまたま完結せる姿をもって現れた個々の所産よりも大切であろう。」(斎藤栄治氏訳、四頁。)

この態度はグンドルフと両極にあるかにみえて、表裏一体を成すものである。彼が結果たる作品から向ってゆくのに対して、此は制作の過程からゲーテに迫進するにほかならない。

クルト・マイの瞳目すべき論文『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』は教養小説か。』(Kurt May: „Wilhelm Meisters Lehrjahre,“ ein Bildungsroman ?) (Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte, 1957, 31 Jahrg. Heft 1, S. 1—37) もまた、すぐれた解釈家の仕事としての長短をもっているように思われる。細部の読み方においてまことに鮮かに、そしてゲーテの生と同一実体としての作品の解釈としては必ずしも正しいとは思われぬ結論に達している。彼の三十七頁にわたる研究は、やがては『修業時代』は、「古典主義的人文主義とその調和的全人的人間性理念の意味合いにおいては決して教養小説ではない。」(S. 33) という結論に至る。たしかに教養が曖昧な概念のもので、無雑作に、たとえば「ナターリエと結びつくことによって、その兄弟や友人たちと誓いをたてることで、ウィルヘルムの天性の調和的な教養を形成しようという努力は実現されたのである。」(Melitta Gerhard: Der deutsche Entwicklungsroman bis zu Goethes „W. Meister“ (1926) S. 142) とするような考え方はここでは否定されている。ゲルハルトは、たしかにマイの云うように、貴族的市民的社会の一員となることで、ウィルヘルムの自己と世界とが和解し、素質と教養諸力が調和したと考えている。調和的全人的教養ということについて更に考えてみる必要はないか、これは市民社会の一員として出発する事情とは相反概念である、とマイは考える。作者ゲーテは当時の市民社会においては、ギリシヤ的な調和的普遍的教養形成は画餅にすぎない、と考えていた。だから主人公も作者ゲーテの前からも、作品が進むにつれて調和的教養などは消え失せてしまい、作者はむしろ主人公がこの種の教養を断念する次第を描いたのだ (Vgl. S. 34)。ウィルヘルムの到達したものは局限的実践的人間性理念なのだから、これは正しい意味では教養とは呼べない。この作品はしたがって教養小説と呼ぶことはゆるさず、とこの立場から彼は従来の「マイスター」研究史を一瞥し、ヴァント、ゲルハルト、エーリヒ・トゥルンツ、ボルヒェルト (Heinrich Borchardt: Der Roman der Goethezeit (1949)) などを批判する。

マイがここですべての方法は、すでに抒情詩、小説の各般にわたって新鮮な解釈をした人らしく、あくまで作品に即する態度であ

って、意識無意識を問わずゲーテの生について、体験については何も語らない。それどころか凡ゆる理念史的、精神的、心理主義的把握を拒否する。我々が『マイスター』に接する際に予想しがちな用語、たとえば有機体、エンテレヒー、等の用語は意識的に避けられている。彼はゲーテ研究につきまとう理念史的な前提(なれあいといつてもよいであろう)を避けることによって、作品の本来あるところを正確に捉えようとする。例えばこうである。「芸術的原理と道徳的原理が、ウィルヘルム・マイスターの教養が進んでゆくうちに均衡を得て、夙うに局限された教養理想と調和するのかどうかはこの巻(第七巻)で決定される。というのは、ウィルヘルムのなかで宗教的な領域が今後発展する余地はないからである。ウィルヘルムが、人間として生れついた一切の心情的精神的諸力を調和にまで至らせるというのぞみは、もう私達からは消え去ったわけだ。私達は、既に今まで大分時間をかけた作者が物語の終りに向って急いでいることを感ずる。教養という言葉、概念は第七、八巻の思索的な談話の中では前より一段とまれになり以前のゆたかにして重要なひびきを失ってきているのである。」(S. 28)さらに、第七、八巻においては、ウィルヘルムの芸術的傾向が、一段と強まった教育あるいは自己鍛錬の結果要求される社会的倫理的振舞のうしろに退いてしまうことになる。これははじめ教養の旅にのぼったウィルヘルムとは格段の違いである。終りに向うにしたがって、教養概念は必然的に狭隘化する。それは調和的全人的教養概念への控え目ながら批判の態度なのである。前には叔父(Oheim)が「美しき魂」を超越したが、今やナターリエが叔父に打勝つ。第七、八巻から、真一文字に神に向うウィルヘルムや、以前芸術制作までしたウィルヘルムは想像もできない。彼は道徳的人間の世界で、ひたすら有益で実用的な生を強調するが、芸術に対しては単なる観照にとどまってしまうという。——マイはここで教養価値の代表として「美しき魂」——宗教的、叔父——芸術的、ナターリエ——倫理的という図式を考えている。ナターリエは前二者のシンテーゼである。浩翰錯雑の『マイスター』の世界を、種々のシェーマあるいはシュブエーレに整理するのは、マイにかぎらずグンドルフ、シュレヒタ(Karl Schlehta : Goethes Wilhelm Meister (Klostermann 1953)) などにも行われていることであり、作者が此等の人物を象徴として描き出し象徴としてのみリアリティをもたせた人物たちであるから、それ自身さしつかえはないが、この際大切なのは教養される主人公ウィルヘルムなのであって、諸人物が各々孤立した存在であるにもせよ、受けとめて自分の体験とする主人公にとって孤立して経過してゆくものではない。しかも主人公ウィルヘルムは極性と高昇を教養法則としたゲーテの「愛する似姿」である。彼に対する影響

を失って行ったものはそれだけ早く私達の前から、主人公の前から姿を消す。メリーナもラーエルテスも、ゼルローも同様であり、男爵や男爵夫人もそうである。作者が主人公のために最後まで傍らにのこしておいた者達、ミニヨンや豎琴ひき、それに素朴な官能の権化であるフィリーネこそ作者の計画的な意図の担い手といわねばならない。彼らは成程「塔」の背後に退いて、もはや主人公に何の働きもなしえないように見えるが、フィリーネはその素朴で健康な官能性をもって、理性的な教養世界の中で主人公に生氣ある人間性を呼びもどし、ミニヨンは情熱的な、全く言葉通り受動的な死をもって主人公の心に過ぎ去ったシュトルム・ウント・ドラングの詩人の面影をとどめる。彼が珍しく腹をたてて、ヤルノーの高飛車な言葉に抵抗し、正面きって「塔」の世界に疑念を表明するのも、心の奥底にミニヨンの死という体験による感動があるからにほかならない。作者がこの時期に心を悩ましていた一つに、ミニヨンをどう始末するか、ということがあったことは疑いないのである。彼は「やめて下さい。もう何も聞きたくもない。傷ついた心にはそんなものはちっとも効かぬ葉なみですよ。」(H. A. Bd. 7. S. 553) といってみたりして、結局この第五章は、司祭やヤルノーの思いあがりに対して、「縁結びの道楽などは恋し合っている人達にまかせておくべきものですよ。」という不機嫌なせりふでおわるのである。なるほど不気嫌にはなったが、彼はここでヤルノーから「塔」の教養原理を聞く機会をえた。ミニヨンの死は若き日の亡霊をおいはらおうという作者の意図の上でも、主人公の教養体験の上でも立派な働きをしたのである。作者ゲーテがこの種のデモーニッシュなものに対していかなる位置にいたかはミニヨンの葬礼や、以下の出生の物語の描写によって明らかである。『親和力』におけるオットーリエの死を想起させるのは少しも不思議なことではない。——

しかしながらマイはこの作品に浪漫的残渣を少しもみとめない。彼によれば、第七巻以後終末までは、もっぱら人間機能の一面性を強調する道徳的人間性がウィルヘルムの中に発展して、彼が「塔」の一員となるに及んでその極に達する。宗教的意向にも芸術意志にもまさって、以前の見知らぬ男たちから暗示されていた道徳的実践的要請が、彼の心の中に根を据え、強調されることになる。第八巻に見られる古典主義的芸術論は、ゲーテが記述しているだけであって、ウィルヘルムの上には何の作用も及ぼさぬ。彼のみでなくナターリエも芸術に対して何の積極的関心をもちたない。しかもそのナターリエが彼の中に占める唯一のものである。(Vgl. S. 29) ウィルヘルムが心の中に真の教養がはじまったと感じたとき、その教養とはもはや理想的調和的全人的なものではなく、局限化された一面的

教養を意味するのであって、たとえば愛人ナターリエをも、子供の母として眺め、かく扱ふようになる。(Vgl. H. A. Bd. 7. S. 602)
マイの捉えたナターリエはほとんど「塔」の一員としてウィルヘルムに作用する存在である。彼女はホーエンシュタインが云う如く、「抽象的な、ひたすら理想を目指すギリシヤ的ドイツ精神の」持主でもなく(Vgl. Hohenstein : Goethe (1930) > ホルヘルトの
ように、「古典的教養のイデー」でも(Vgl. H. Borchardt : Der Roman der Goethezeit (1949) > シュタイガーの如く、「純粹に
美的な自然」でもなく。 <E. Staiger : Goethe Bd. 2. S. 164 >)したがって『修業時代』がまっしぐらに『遍歴時代』に向つて突進
するのは必然の結果である。(May : S. 32)

三

このようなマイの結論はどうであろうか。考えられる素朴な疑念を整理するならばこんなことにならうか。① 教養とは本来マイが
考えているように、「古典主義的調和的全人的普遍的なもの」だけを指すのであって、「実践的局限的一面的なもの」であつてはならな
いのか？ ② 仮にそうとした場合このロマンは「塔」の教養理想に一直線に進んでゆく動きをもつ作品でなければならないか、もつと
相重り相接し合う立体的な動きが大切ではないのか？ ③ 何よりマイは「塔」とナターリエを殆んど同一の教養理想を示すものと考
えているが、ナターリエは「塔」のなかでも特に、本当に美しき魂として扱われている存在ではないか？ ロタリーオの言葉がその根拠
になる。(H. A. Bd. 7. S. 608) どんな階層でもウィルヘルムの教養の本質には恋愛が付属する(Vgl. Gundolf : Goethe S. 517)
のであって、「塔」の作用と、ナターリエの作用は自ら別なものではなからうか。それは一七九三年の「マインツ陣中メモ」における
〈司祭教育的夢、エミリーエ(ナターリエ) 女性的美的・道徳的現実〉という図式が示してはいないか。即ちゲーテにとつて「塔」
は所詮夢に過ぎず、愛を伴う教養だけが夢を現実と化しうるものではないのか？ ということなどであらう。

まずマイの考えたような教養概念の狭隘化は必然の帰結とは思われない。教養とは本来魂の育成を目指すものであるから、その

教養理想として特定の限定を為すことは正しくないであろう。云うまでもないことであるが教養理想は時代、環境によって必ずしも一定のものでありえない。レアルレキシコンの筆者、クリスチアン・トゥアーヨンが二十世紀の社会主義的傾向のものまでを教養小説に含めてゐるのもその現れである。(Vgl. Ch. Touillon : Bildungsroman im Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte Bd. 1. (1925)) あるいはまた『演劇的使命』を若しかりに演劇小説ではなくて教養小説であるとするならば(グンドルフ、ゲルハルトなどはそれであるが)、それは彼自身の生の象徴的叙述として、ウィルヘルムが教養意志と能力をもった若々しい素材として考えられるのであって、作者の包懐する教養理想が古典主義的調和的全人的理想だからがためではない。さらに一步をゆずって、『修了証書』にのぞましい教養理念が認められねばならないとしても、この「修了証書」はまさしく典型的な教養の原理を示しているものであって、マイのいう古典主義的調和的全人的という条件に抵触するとはおもわれぬ。

ところでゲーテの教養理念が典型的に示されている例として第五卷第三章のヴェルナーへの手紙を挙げることは既に常識であろう。「一言でいうと、自分自身をあるがままに形成しようということが、さだかならぬながら僕の幼年時代からのねがひだったし、目的でもあった。今だっておなじ考えを抱いている。ただそれを可能にする方法が多少はつきりしてきただけだ。」(H. A. Bd. 7. S. 290) 次いでウィルヘルムは貴族の教養と市民の教養について述べる。「ドイツでは貴族にはある程度普遍的な、こう云っていいなら自分本位の教養が可能なのだ。……だが人格だけはどうにもならない。」(S. 290) しかも彼は「市民に生れたがために得られぬ僕の資質の調和的な完成、それに対しては僕は抑えがたい欲求を感じている。」(S. 291) のである。この古典的教養理念はいつ書かれたものか、明らかに『演劇的使命』の第七巻に着手したワイマル前期のゲーテではなく、イタリヤから戻って『修業時代』にとりかかったゲーテである。この橋渡しの第五巻は極めて困難だったので、第六巻と併行して書き進められたものであるが、この作品の後半部はイタリヤで得られた「ウィルヘルムに対する充分に新しい考え」と、「きわめて奇妙な構想」(Italienische Reise, 2. Okt. 1887, H. A. Bd. 11. S. 411) のもとで書かれた部分であり、いわばこの第五卷第三章の教養論は教養小説となつた『修業時代』の宣言である。だから、「四十歳までには完成したい」というねがひのもとに試みられたこのロマンはゲーテのこの時期における生の決算であり、本来の生の等価物として表現されたもの故、この理念が晩年の『年代記』や『ゲーテとの談話』における感想と同じものであつて少しも不思議ではない。

い。たとえば老人の眼に映った『修業時代』は、『年代記』一七八六年のところには、「実にたくさんの人間がこれによって彼等の生活の最も美しい部分を浪費し、最後には不思議な憂鬱におちこんでしまう。そうかといって凡ての誤った道が評価も出来ぬ程の善にいたりつくことも可能なのである。これこそ『ウィルヘルム・マイスター』のなかで再三にわたって展開され、明らかにされ、更に確証され、ついにははっきりした言葉で表現されている一つの予感にはかならない。その言葉とは、へぼくにはあなたは父親のろばを探しに outcomes、王国を見付けたキシの子サウルのようにおもえますね」というのだ。」(Tag- und Jahreshefte, Bis 1786. H. A. Bd. 10. S. 432) エッカーマンとの談話のものはよく引用されるものであるから改めてひくまでもないと思われる。人間は愚昧と迷いにも拘らず、より高い手に導かれて幸福な目標に到達するようにみえる、というゲーテの生の確信である。(Vgl. Gespräche mit Goethe, 18. Januar 1825)

このようなゲーテの生に裏打ちされた教養理念は、「塔」の人達にも「修了証書」にも見られるもので、作品を一貫する確信であり、それに比べれば「局限的実践的教養理想」は主人公の行手を暗示する一つの、唯一のではなく任意に一つの方向であるに過ぎない。勿論『遍歴時代』はその成熟の次第を示してはくれるが、それが生からはきだされるまでにはなお十数年を要するのであって、たとえばヤルノーの言辞のなかにモンターンを思わせるものがあるからといって、そのまま『遍歴時代』の前史的な作品であると決めてしまいうわけにはゆかない。この古典主義時代から晩年の象徴の世界にたどりつくまでには、ゲーテの生はさまざまのリズムを重ねて、彼の言葉を借りれば、ディアストレとジュストレを繰返して、高昇すると同時に変貌してゆくのである。そこには「人間性のあらゆる発現が、即ち感性と理性、想像力と悟性とが一つの決定的な調和にまで作りあげられなければならないことを確信しえない人は、喜ばしからぬ束縛のうちに、いつまでも苦しむことであろう。」という確信がある。(シュテューテンロートの著書のための批評文、一八二四年奥津彦重氏・『ゲーテ序論』一七九頁参照。)

司祭について一番早く私達に伝えてくれるのは「美しき魂」の筆である。司祭は叔父にこう云っている。「人間を教育する際に何か効果あらしめようと思うならば、その人間の性向と願望とがどういう方向に向っているか、を先ず見なければなりません。その次にできるだけ早くその性向を満足させるような、できるだけ早くその願望を達成させるような境遇においてやらねばなりません。」(H. A.

Gd. 7. S. 419) だが「美しき魂」には、「自己と眼にみえない唯一人の誠実な友(日神)との親交に連れてゆくような一切のものを、子供たちから遠ざけようとする」(S. 419) のが気がかりである。

それぞれの人間を生れついた素質や傾向に従って教育しようという司祭の考え方は明らかに古典主義教育理念に立っているものであって、そのためには何よりも先ず自分の生れつきの素質や傾向や願望を自分で自覚することが前提になる。「あらゆる素質は大切であって、展開させられなければならない。一人が美だけを促進し、一人が用だけを便ずるとすれば、双方が相俟ってはじめて一個の人間を形成するのである。用はひとりでに促進される。なぜなら衆人がこれを作りだし、万人がこれを欠きえないからである。而るに美は促進されねばならない。これを顧みず者は少なく、これを必要とする者は多いからである。」(H. A. Bd. 7. S. 552)

これはもう完全に古典的教養概念ではあるまいか。シラーの『美的教育書簡』に示された「いったい人間はなにかある一つの目的のために自分自身を怠っていることができるようにきめられているものか。理性がそのさまざまな目的によって私達にあたえる完全性を、自然がそのさまざまな目的によって、私達から奪いとってよいものであるか。」(Schillers Werke (Meyersklassiker Ausgabe) Bd. 8. S. 191) という古典的調和的人間性理想に抵触するものは何もないものと思われる。マイはシラーをひきあいに出すにあたって、この兩者の間には鋭い一線がひかれるべきであって、シラーならびにヴィンケルマン、ヘルダー、フンボルト等の新人文主義的理想主義的人間像と、『修業時代』にみられる「現実主義者の奇癖」の持主であるゲーテ的人間像との差を強調している。彼の解釈によれば、シラーは『ヒューベリオン』におけるヘルダーラインの如く、諸力の局限化、拮抗作用、近代の分業性に敵意を表明するのであるが、「このゲーテ的な教養小説は、彼の時代の人間はもうその本質を調和させえないこと、それ故自己を断片、部分としてしか形成しえないことを表現している」(S. 36) のであって、ヤルノーの口から述べられる前述の「修了証書」の一部は、相対的教養形成の立場を超えて、ウィルヘルムを『遍歴時代』の社会的倫理と教育の中核へと進ませる認識だ、と考える。ゲーテはここで「個としての人間のなかにウルフェノーメン的人間を実現することが不可能であることを描こうとしたのだ。」(S. 34)

マイが次に指摘しているのは、教養価値の孤立化ということである。マイはいう。第六巻の「美しき魂」に代表される宗教的教養や、第六巻に姿を現わし、のちに遺産たる芸術品によってウィルヘルムに作用する叔父の美的教養は果してウィルヘルムの教養過程の一部

を成し、教養体験にまで高められているであらうか。それらの教養は価値として示されているにすぎないではないか。「教養とは本来過程であり、過程のうちに過程としてのみリアリティを持ちうるもの」(S. 99) だから、ウィルヘルムに欠けている宗教性を一女性の過度な告白によって補いうるようなものではない。作者は後半おわりをいそいでただ必要な教養価値を羅列していったにすぎないのであって、『ヴェールター』世界の内部で以前に考えられ、要請され、希望されていた全人性や統一性とはうってかわって、『修業時代』を結末づけるにあたって、教養の意味での宗教と芸術、芸術と道徳との融合は全く存在しない。ただ典型として「美しき魂」や叔父やナターリエが分立して孤立しているだけである。彼ら彼女たちのさまざまな特性が、どうしてウィルヘルムのなかで生々と融けあい、和合してはいけないのだろうか？ と疑念を抱くのであるが、虚心に読むならば第八巻における「美しき魂」や叔父のウィルヘルムへの働きを見とることはさほど困難ではない。さらにまたウィルヘルムの決意がいつでもミニヨンや堅琴ひきのひきおこす事件の後に行われているのを見ても、またナターリエへの接触がつねに呼びもどされた根源的な感情を契機としているのを見ても彼らがなお価値として生きているという事実は明らかである。ミニヨンの葬礼をなぜあのような浪漫的形式のもとに行わせたか、堅琴ひきやミニヨンの出生の秘密を全体のバランスを害なうまでの分量と調子をもって語らせたか、この結末の巻には、ゲーテ的なものの一切、風濤的なもの、古典的なもの、浪漫的なもの、現実的なものが集結している。成程、彼等は新しいウィルヘルムの為にはいずれ姿を消さねばなるまい。第八巻にシュトルム・ウインド・ドラングの亡霊があらわれたとはいわぬまでも、『親和力』のオットーリエの死や、『バンドーラ』における回帰した青春が示すような、彼本来のデモニッシュなものの人格形成に於ける意義が全く彼の心から失われてしまったわけではない。即物的な図式によって捉えられるものではない。

次に「塔」についてはマイも一つの教養段階に過ぎず、最終的位置にあるものではないと考えているようであるが、なお彼らのウィルヘルムに対する役割を全篇の中心主題と考えている。だがこの作品には中心になるイデー、原理はなく、あるのは教養されるウィルヘルムの受け方であり、ここでは能動的な教養原理よりも、受動的な主人公の過程が大切なのである。ゲーテがなぜこのような受動的な人間を愛する似姿としてえらんだかと思えば、この作品のよみ方は自ら明らかである。この内気な受動性はパルチファルやジンブリチウスに共通するドイツの小説の主人公であり、この作品から特定の原理、目標をひろいあげてはいずれは作品を強いる結果にならう。

そこにゲーテの生と直結するこの作品の意味がある。一七九六年十一月二十四日のフンボルトの読み方は正しい。「何人も『マイスター』の中に自分の修業時代を見付けるだろう。」(H. A. Bd. 8. S. 553)

つまるところ、マイが余りに作品に即して解釈を企てたために、むしろゲーテ的な生の前提、たとえば『詩と真実』を書くにあたっての、「あの中には人間生活の多少の象徴がある。私はあの本を『詩と真実』と名付けたが、それは高い目的によって低い現実の領域から向上しているからなのだ」という眼付とか「一切はただ大きな告白の断片にすぎない。」(H. A. Bd. 9. S. 283) という態度をみるならば、主題は主人公ウィルヘルムの性格と過程の造型にあることは当然であり、その造型に寄与するものは作者の生であらねばならない。簡単に云えばこの小説はもつと作者に密着して読まれるべきであって、社会思想的、あるいは審美的位置から眺められるべきものではないとおもわれる。シラーが「ウィルヘルムは空虚な定まらぬ理想から、定着した活動生活へ入ってゆきますが、その理想化する力は捨ててけません。」(8. Juli 1796. H. A. Bd. 8. S. 541) というのも彼の眼識の確かさをおもわせる。この理想化する力をそ教養小説たることを決定するものであらう。

注の H. A. とは Goethes Werke Hamburger Ausgabe の略記である。